
東方水仙華

遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方水仙華

【Nコード】

N0409U

【作者名】

遊

【あらすじ】

疎まれ忌み嫌われた少年が寝ている間に八雲紫に連れ去られてしまった

全てが見える少年が幻想郷で何を思い考え行動していくのか…

少年の新しい物語が始まる

第一話 最初から展開が早くて大丈夫か？ 大丈夫だ問題ない…多分

…もし、自分に人と違う力があると気がついてしまったらどうする？

その力を見せびらかす？

それとも、ばれないように必死で隠す？

俺はどちらにしても行き着く先は一緒だと思う。

なぜなら、何をしようが、最終的に自分たちと違う力は恐れられ忌み嫌われるからだ。

え…？ 何故こんな話をするのかって？

大体予想がつくだろ、俺が忌み嫌われる存在だからだよ。

俺は子供の頃から全てが見えた、結果や未来などはもちろん、人の過去なども見えた。

だからだろう、小学校の高学年にあがる頃には、俺は恐れられていた。

…誰とも話さず、誰とも関わらず、毎日を過ごしてきた。

そんなある日、気づいたら俺は違う世界にいた。

そう、あれは俺が中学校を卒業した日の事である…

「くああ、眠む…」

その日、俺は卒業式を終え家に帰るためふらふらと道を歩いていた。
ちなみに俺の名前は仙道水城センドウミズキちよつと異常な高校生だ…まだ入学してないがな。

「どうでもいいがほんとに眠いなあ」

そんな事を呟きながら歩いていくと誰もいない公園が目に入った。

「んー、ちよつと寝てくかな」

ふらふらとした足取りで公園に入り、ベンチに横になる。

「ふあああ…、お休み…」

そう言つて、少年は眠り始めた。

その少年を何処からか見つめる少女が一人いた。

「あらあら、こんなところで寝ちゃったら誰かに襲われても知らないわよ…ふふっ私みたいな人にね」

そう言つて少女は扇子を取り出すと空間に裂き開くと水城を落とす。

「幻想郷に一名様ご案内」

ふふっ、彼が何をしてくれるのかこれからが楽しみね」

そう言つと新しく空間を開き自分もその中に入って消えていった。

こうして嫌われ者の少年は寝ている間に連れ去られてしまったのだ。

第二話 異常な少年と博麗の巫女の出会い（前書き）

初めまして遊と言います

私の作品を読んで少しでも多くの方に楽しんで貰えると幸いです

それでは、二話をどうぞ

第二話 異常な少年と博麗の巫女の出会い

水城 side

「知らない天井だ…

…て、あれ？俺公園で寝てたはずなのになんでだ？」

俺が首を捻っているといきなり襖が開き脇を露出した巫女が部屋に入ってきた。

「あら、やっと起きたのね体の調子は大丈夫？」

「え？ああ大丈夫だ」

「そう、ならよかった

あ、自己紹介がまだだったわね。私は博麗霊夢、巫女よ、あなたは？」

「俺は仙堂水城、異常な高校生だ、よろしく」

俺は自己紹介をし霊夢と握手をする。

「ん、よろしく

で、聞きたいことがあるのだけど大丈夫？」

「別に大丈夫…グー…夫だぞ」

「…とりあえずご飯にしましょうか」

「…すまん」

「こっちょ」

霊夢はそう言って部屋から出て行ったので俺も霊夢の後をついて行く事にする。

「ここで待ってて、今持ってくるから」

「わかった」

霊夢が飯を取りに行っている間に軽く辺りを見渡す。

「…純和風って感じだな
落ち着くし、こういう雰囲気はいいな」

「それはどうも
はい、持ってきたわよ」

「お、ありがとう
てか、今の聞いてたのか」

「ええ、それより早く食べましょ」

「そうだな、いただきます」

霊夢に言われて食事を食べ始める。

「うん、うまい」

「それはよかったわ」

その後は会話もなく、ゆっくりと食事を進めていった。

「御馳走様でした」

「お粗末様

じゃあ私食器洗ってくるから少し待ってなさい」

「了解した」

霊夢が皿を洗いに行っている間に少し物思いに耽る。

（人とこんなに話すなんて、ましてや手料理食ったのなんて久々だ
…やっぱり楽しいな）

「…城、水城！」

「…ん？」

「ん、じゃないわよ

呼んだら反応ぐらいしなさい」

「あー、わるいちょっと考え後してた」

「そう…ま、いいわ

はい、お茶」

「お、さんきゅ」

俺は霊夢からお茶を受け取り一口する。

「さてと、そろそろ話を始めましょうか
そうねえ、とりあえず私が幻想郷の説明をしましょうか」

「おう、頼んだ」

「じゃ説明するわね

ここは幻想郷、妖怪などの忘れられた存在が住む場所。ここは、あなたが住んでいた場所とは結界で隔離された世界で簡単には入ってこれない場所なの、
ここまではいい？」

俺は頷くの見た霊夢は話を続ける。

「で、あなたのみたいに外の世界から来た人を外来人というのだけ
ど…

あなたは今日の朝、掃除に出たら境内に倒れてたのよ」

「…でも、俺寝てただけだぜ？
結界とかも越えてないと思うし」

「それについては心当たりがあるわ」

「ほんとか？」

「ええ、この幻想郷を作った最強の妖怪、『八雲紫』たぶんこいつ
の仕業よ」

「八雲紫か…」俺はそいつの名前を反芻すると霊夢に向き直る。

「霊夢ひとつ聞いていいか？」

「別にいいわよ」

「あちらから結界を越えてこれるなら、こちらからあちらに戻ることはできるのか？」

「ええ、できるわよよく気がついたわねでも…」

「でも…、何だ？」

「あなたはもう帰る事はできないわ」

「…だろうな」

「…驚かないの？」

「いや、でもって言われた、時点でなんとなく『結果』はわかってたから」

そういつて、俺は笑う。

「なんだか、知っていたみたいない方ね」

「…知ってたみたいな言い方じゃないんだよ」

俺はわざとらしくそこで区切ると。

「俺が公園で寝る事も、八雲紫に連れ去られることも、霊夢と出会うことも、そ

の質問をされる事もすべて知ってたんだよ」

俺はそういつてまた、笑った。

第三話 新たな世界での第一歩（前書き）

第三話投稿です

都合上普通の魔法使いは出ません

第三話 新たな世界での第一歩

水城 side

「それってどついう意味よ…」

「え…そのまんまの意味だけど…
そつだな説明するよ」

「俺は子供の頃から、全てが視えた
未来も結果も過去も情報も視るといえる物は全てだ」

「……………」

「現代ではそんな力を持った奴は恐れられて誰も寄ってこないんだ。
だから、今日視た未来でここに来れることが分つた時、現代から逃
げる為にはこれしかないと思った。
だから、俺はわざと落とされたんだよ」

「そつ…」

「騙してたみたいで悪かつたな、もうそろそろ出てくよ」

「待ちなさい、出てくつてどこに、行くのよ」

「人里辺りにでも行こうかと思つてる」

「場所は…なるほど、視たのね」

「ああ、幻想郷の情報は大体視たから行き方は分かるよ」

俺はそういうと霊夢の方に向き直り、頭を下げる。

「悪かった、飯までご馳走になったのに騙しちまって」

「別にいいわよ、それより、気をつけなさいよ、妖怪もいるんだから」

「大丈夫、避けてくから」

「聞けば聞くほど凄い能力ね、あ、そうだちょっと待ちなさい」

霊夢は立ち上がると箆笥の中を漁り始めた。

「えっと確かここら辺に仕舞っておいたはず…、あった
水城、はいこれ」

霊夢は箆笥から取り出した、数枚の御札と三枚の白紙のカードを俺に渡してきた。

「これは…スペルカードと御札か」

「そ、スペカは説明しなくてもよさそうね、
御札は万が一妖怪に出会ったときにでも使いなさい、妖怪に向けて
投げれば、動きを止めるくらいは出来るはずだから」

「わかった、すまないな、こんなに貰ってしまつて」

「別にいいわよ、その代わり今度来るときはお賽銭奮発して入れてきなさいよ」

「わかった、じゃあまた来るよ」

俺は霊夢に別れを告げ外に飛び出す。

「さあ、俺の新しい生活の始まりだ!」

こうして俺は、幻想協での生活の第一歩を踏み出したのだった。

第三話 新たな世界での第一歩（後書き）

次こそ普通の魔法使いがです

それでは第四話で

第四話 新たな力と魔法使い（前書き）

やっと書き終わった…

パソコンで書けないから投稿しにくい

とりあえず四話です

第四話 新たな力と魔法使い

水城は人里への道をゆっくりと歩いていった。

「んーここをまっすぐ行ったら人里か…。
着いたら飯かな昼近いみたいだし」

そんな事を呟きながらゆっくりとした足取りで進んでいく水城だったが一つの疑問に気づき立ち止まる。

「…さてよ、そういえば俺こっちの金ねえじゃん…今持ってる金は使えないし…どうするか」

水城は道の真ん中に呆然と立ち尽くす。

「あ、換金できる場所視ればいいじゃんか」

水城は一度目を閉じ、再び目を開ける、すると先程まで黒色だった目は綺麗な青色に変わっていた。

「やっぱり目が気持ち悪いな…まあいいや換金できる所は…香霖堂っていう所か、えつと行き方は…」
「…おい、その人退いてくれ！」

「ん？」

後ろから声が聞こえてきたので振り返ると、白と黒の魔女みたいな格好をした人が箒で突っ込んできた。

「ちょ、ええ…」

「その反応なんだよっ！てか、早く退いてくれ！」

徐々に近づいてきた少女が叫ぶので水城は横に避ける。

水城が退いた位置に少女が激突する。

「いてて、今回も失敗か」

「おい、大丈夫か？」

水城は地面に座る少女に手を差し伸べながら聞く。

「ん、さんきゅっ、それと大丈夫だぜ
よくあることだし」

「よくあるのかよ…」

「で、お前誰だ？
見ない顔だけど」

「ああ、俺か」

俺は仙道水城

つい、さっきこっちに来た外来人だよろしく」

「お前、変なやつだな…、まあいいや、私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ
よろしくな！」

魔理沙はそう言って水城に手を差し出す、水城はその手を取り握手を交わす。

「よろしく、でだ、一つ質問いいか？」

「ん、ああ別にかまわないぜ」

「えっと香霖堂って場所わかる？」

「わかるぜ、香霖堂になんか用事か？」

「金の換金、後は武器かな」

「なるほど、だったら私が案内してやるぜ」

魔理沙は水城にそう提案をする。

「いいのか？」

「別にいいぜ」

「そうだ、水城は飛べるか？」

「いや、飛べない」

「そうか、なら私の箒に乗せてやるっ」

「まじか、悪いな」

「気にすんな」

「ほら、早く乗れよ」

「ん、こうか？」

水城は魔理沙に急かされ箒の後ろに乗る。

「じゃあいくぜ

しっかり捕まってるよ！」

「お、おう」

ふわり、という言葉が似合うようにゆっくりと浮き上がる。

「おー、浮いてる」

「これぐらいで驚いてちや困るぜ
じゃあ、最初から全力でいくぜ！」

「な、うわああああ！」

次の瞬間、水城の視界がぶれた、水城の視界に見えるものが全て高速で後ろに消える。

「ひゃっはー！

まだまだスピードを上げるぜえ！」

「止める！これ以上あがったら死ぬ！」

「こんなもんじゃない、私のスピードはこんなもんじゃないぜえ！」

「ぎゃあああ…」

水城の意見を見無視し全力全開で空を飛ぶ魔理沙、しばらくその調子で飛んでいると、遠くに小さく建物が見えてきた。

「お、みえてきた

水城、もうすぐ着くぜ」

「……………気持ち悪い」

「ちょ、おま、後ちょっとなんだから香霖堂まで我慢しろよ」

「…了解、うぷっ」

「あ、よし

香霖堂だ降りるぞ」

魔理沙はそう言い、香霖堂の前に着地する。

「ちょっとそこの草むらで吐いてくる…」

「いいからさっさと行けよ」

水城はふらふらとした足取りで草むらに向かっていった。

「全くあれぐらいのスピードでへこたれるなんてへたれだな、あい
っ」

ギィィ…

「…誰だか知らないけど人の店の前で騒がないでくれるかな」

「お、香霖おはよーだぜ」

「なんだ…魔理沙、君か今日は何の用だい？」

「今日は私の用はないぜ案内だからな」

「案内？」

「そうだぜ、ほらちょうど戻ってきたみたいだぜ」

魔理沙が指を指した方向に香霖が顔を向けると、そこには口を抑えながらふらふらとした足取りで歩く水城の姿だった。

「だいぶ収まったけどまだ気持ち悪いな…」

「まだ顔色が悪いみたいだけど大丈夫か？」

「何とかな」

「そうか、大丈夫か」

「どう聞いたら、その台詞がでんだよ…」

「えっと、そろそろ話に入っていていいかい？」

「ん、大丈夫だ」

「そうかい、じゃあ、自己紹介でもさせてもらおうかな、僕は森近
カリンスケ
霖之助、ここ香霖堂の店主をやってるよ、よろしく」

「俺は、仙道水城

外人だ、よろしく」

「へえ…外人か

まあいいや、とりあえず店の中に入ろうか
何か用事があつて来たんだろう」

「わかった」

「邪魔するぜ」

水城たち三人は香霖堂の中に入っていった。

「さつき魔理沙から聞いたけど、今日用事があるのは水城君らしい
じゃないか、何の用だい？」

「えっと、現代のお金を換金つてできるんだよな」

「ああ、出来るよ」

「じゃあ、換金を頼む

後、武器がある棚の教えてくれないか？」

水城は財布から現代のお金を、取り出しながら香霖に渡しながら聞
く。

「あるよ、魔理沙君なら分かるだろう案内してあげてくれないか？」

「了解したぜ」

「あ、それと水城君ちょっと待った」

「なんだ？」

「ついでに外の世界の品物があれば買い取るよ」

「いいのか？」

「うん、外の世界の品物は面白い物が多いからね。それにこっちは使う機会がないと思うし、水城君がいいなら買い取るけど」

「んじゃあ、頼む。確か…携帯とゲーム、それに教科書ならあるが…本当にこんなのでいいのか？」

「うん、置いてってくれたら一緒に鑑定するよ」

「わかった、じゃあここに置いとくぞ」

「水城、早く行こうぜ」

「おう、分かった」

水城は香霖に献金と鑑定を頼み、魔理沙に案内されながら、武器の棚に向かった。

「ここだぜ」

「これ全部、武器か…」

魔理沙に案内されてやってきた武器の棚には水城が見たことのないような武器が乱雑に置かれていた。

「銃、刀、これは…魔導書か？
色々ありすぎだろ…」

「なあ、水城
聞いていいか？」

「なんだ？」

「お前って能力持ちだよな
どんな能力なんだ？」

「いや、それ以前に
なんで能力持ちって思っただよ」

「幻想郷に来たばかりのはずなのに落ち着いてるからな
それに、その言い方だと、能力持つてるようにしか聞こえないぜ」

「…それも、そうだな
持つてるよ能力」

「やっぱりな、どんな能力だ？」

「『全てを視る程度の能力』
『線を繋ぐ程度の能力』」

『形無い物を、形有る物に変化させる程度の能力』の三つだ。
まあ、二つはこっち来てから発現したみたいだけだな」

「三つもあるのか
二つでさえほとんど無いのに
どんな効果なんだ？」

「一つ目は、説明が難しいから割愛するぞ、さっきも説明したから
気になるなら霊夢にでも聞いてくれ
二つ目は、言葉の通りだと思う
使ったことないから分かんがな
三つ目も、使った事無いから分かん」

水城は武器を選びながら魔理沙の質問に答える。

「ほとんど、分かってないじゃないか」

「仕方ないだろ、気づいたの今なんだから
説明するついでに、自分の情報見たら増えてたんだし」

「自分の情報…？まあいいや
で、武器は決まったか？」

「ああ、とりあえず
銃二丁と小刀、それと投げナイフだな」

「そうか、決まったのなら、香霖のとこ戻ろっぜ。そろそろ、あつちも終わってるだろうし」

「そうだな、そろそろ戻るか」

水城は買うことに決めた武器を持ち、来た時と同じように魔理沙の後に着いていき香霖のもとまで戻ってきた。

「おや、戻ってきたかい
こつちも今さつき終わったとこだよ
で、いい物はあつたかい？」

「ああ、これとこれだな
いくらだ？」

「ん、これならこの値段だね
換金したお金から引いていいかい？」

「おう、頼む」

「んじゃあ、引いてと
はい、これが残りね」

「ん、ありがと」

「香霖、これでどれくらい生活できる？」

香霖から手渡されたお金を財布の中にしまいながら水城香霖に尋ねるはする。

「そうだね…それだけあれば
3ヶ月は普通に暮らせると思うよ」

「三ヶ月か…
分かった、ありがとうな」

「いや、こつちもいい物が手に入ったから

よかったよ」

「お、終わったか？」

少し離れた位置で商品を物色してた魔理沙が水城に近づき尋ねる。

「終わったよ」

「そうか、じゃあ
人里まで乗せてってやるよ
今度は安全運転でな」

「乗せてってくれるなら
ありがたいが…いいのか？」

「別にかまわないぜ」

「なら頼む」

「じゃあ、そろそろ行くか
香霖邪魔したな、また来るぜ」

「はいはい、今度はちゃんと商品を買って行ってくれよ
それと、水城君もいつでも来てくれていいから」

「ん、分かった
また寄らせてもらうよ」

「ん、またの来店を待ってるよ」

水城と魔理沙は香霖に別れを告げ
香霖堂の外に出る。

「じゃあ、さっそく人里に向かうか
水城、乗れ」

「おう、安全運転で頼むぞ」

「分かってるよ
また吐かれても困るしな」

「それは、魔理沙が悪いだろ」

「いいから、早く乗れ！」

「了解したよ」

水城は、香霖堂に来た時と同じように魔理沙の箒の後ろに乗る、すると、魔理沙の箒はゆっくりと空中に浮かびあがり始めた。

「じゃあ、人里に向かうぜ」

「おう、頼んだ」

二人を乗せた箒は、ゆっくりと空の旅を楽しむように人里の方に向けて飛び始めた…。

第四話 新たな力と魔法使い（後書き）

四話終了

次の章はやつと人里に行きます

次はもう少し早く投稿出来るように頑張ります

それでは、次の章で

第五話 人里の先生との出会い（前書き）

すげえ久しぶりの更新です

だいぶ遅れて申し訳ありません

それでは五話をどうぞ

第五話 人里の先生との出会い

「人里」

「よつと、到着だぜ。」

「ここが、人里だ」

「ここが…人里か」

水城は魔理沙にの筭から降り人里を見回す。

「じゃあ、私は帰るぜ」

「ん、そうか」

ここまで案内してくれてありがとな」

「別にこれくらいなら構わないぜ」

「じゃあ、また宴会があるときにでも会おうぜ」

「おう、わかった」

「あ、それと一つアドバイスだぜ」

「アドバイス？」

「ああ、飯食つたらまずは寺小屋か稗田家に行ってみるといいぜ
そこにいる奴らに会ってこいよ
じゃあ、私は帰るな」

「おう、またな」

魔理沙は水城に手を振ると、全速力で飛んでいった。

「俺はあれに乗ってたのか…」

駄目だ思い出したら絶対吐く
思い出さないようにしないと」

「さて、とりあえず飯食ってから

魔理沙が言ってた

寺小屋か稗田家を探すか…」

水城はそう呟き人里の中心部に向け歩き始めた。

- 人里・中心部 - 水城 side

「雰囲気は昔の日本だな…」

俺は辺りを見渡しながら、歩いていた。

ドンッ！

「きゃ！」

「うお、すいません大丈夫ですか？」

「あ、ああ大丈夫」

俺はぶつかった女の人に手を差し出し掴んだ手を引っ張る。

「怪我はありませんか？」

「大丈夫だ、それよりもよそ見をしながら歩くのは
関心せんな」

「…申し訳ないです」

「…まあ、今度からきょうつけるといい
それで、見ない顔だが人里にどのような用事だ？」

「俺、外来人で仙道水城つていいいます
人里には飯屋と宿を探しに

あ、あと魔理沙が言ってた寺小屋と稗田家に用事が…」

「なるほど、外来人か」

私は上白沢慧音、寺小屋で教師をやってる」

「寺小屋で教師…マジですか？」

「ああ、本当だ」

俺は魔理沙に言われた寺小屋の人に会っていたのか…
ラッキーだな。

「で、水城は私に何か用事か？」

「あー、ちょっと長くなると思うんで
先に飯食ってきてもいいですか？」

「ああ、なら私も行こう」

まだ昼飯を食べてなかったからな」

「あ、じゃあいつしよに行きましょうか
どこかいいお店ありますか？」

「なら、旨い饅飩屋があるんだ
そこでいいか？」

「あ、はい大丈夫です
饅飩か…久しぶりだな」

俺は慧音の案内で近くにあった、饅飩屋に昼飯を食べに向かった。

- 饅飩屋・野菊 -

ガラガラ…

「ここだ
お邪魔するよ」

「おや、先生
今日は一人じゃないのかい」

「ああ、さっきそこであつたんだが、私に用事があるらしくてな
落ち着いて話すならここだと思ってつれてきたんだ」

「なるほど、そうですか」

「あ、私はいつもと同じものを頼む
水城お前はとうする？」

「あ、俺も慧音さんと同じの頼みます」

「あいよ、天麩羅饅頭二つね」

「さて、うどんができるまで
水城の用事でも聞こうか」

「用事…えっと用事があるわけでもないんですが
魔理沙が寺小屋か稗田家の人たちに会ってみるよって言うてたのが
理由なんですけど…」

「…魔理沙がか

ふむ、水城は宿を探しに人里に来たのだろう？」

「はい、そうです」

「生憎なんだが、宿は今、外来人で一杯だったはずだ」

「え…マジですか？」

「ああ、確かそうだったはずだ」

「…あー、どうしようかねえ」

「それなんだが…水城がよかったら家に来るか？」

「…え、いいんですか？」

「ああ、私は気にしないよ

部屋も余ってるし水城がいいなら

来るといい、まあ少し仕事を手伝ってもらっけどな」

慧音さんが出してくれた案を俺は頭の中で考える、
まあ、断る理由もないしありがたい申し出だしな。

「…じゃあ、頼めますか？」

「ああ、よろしく頼む」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「お待ちどうさま

はい、天麩羅餛飩二つね」

「ん、ちょうどいいタイミングだったな
さ、食べようか」

「おお、旨そうだ
いただきます」

「いただきます」

俺は出てきた餛飩を一口啜る。

「旨い…」

「ん、それは良かった」

「いや、ホント旨いな

天麩羅も衣がしつかりついてて
汁がしみ込んでいい味になってる」

俺は久しぶりに食べた、インスタント食品以外の料理に
感動し、汁まで残さず食べてしまった

「ふう…ごちそうさま」

「ふう、いい食べっぷりだったな」

「1人、ここの鰻鮓が旨かったのもあるが、
まともな料理を久々に食ったもんで思わず…な」

「…そうか、まあ詳しくは聞かない」

「助かる」

「さて…そろそろ
寺小屋に戻るか…主人勘定を頼む」

「はい、天麩羅鰻鮓二つで
50円ね」

「50円…これで」

「はい、丁度ね
まいどありー」

「さ、水城行こう」

「ああ」

俺は慧音と共に鯉鮓屋を後にした。

「さ、ここが寺小屋だ入ってくれ」

慧音についてやってきたのは鯉鮓屋から、歩いて数分のところにある寺小屋だった。

「お邪魔します」

「そんなに硬くならなくてもいい
水城は今日からここに住むんだしな」

「まあ、そうなんだけど
多少は気にするもんだと思うぞ？」

「そういうものか？
まあ、ゆっくり慣れていけばいい」

「ああ、そうするよ」

「じゃあ、今後の話をしようか
とりあえず、居間に行つといてくれ
この廊下の突き当たり右の部屋だ」

「わかった」

「じゃあ、私はお茶を入れてくる」

そう言つて慧音は台所があるであろう場所に向かつていった
俺はいつまでも玄関に立っているわけにもいかなないので慧音に指定
された部屋に向かうことにした。

「昔の日本家屋みたいだな…」

「お茶を持ってきたぞ
つて、どうした辺りを見渡して何か珍しいものでもあつたか？」

「あー、まあこの家自体が珍しいかな
俺たちの世界じゃ教科書かテレビぐらいでしか見たことないしな」

「その、てれび…はわからないが
教科書は興味があるな
持っていないか？」

「教科書？
あー、学校帰りだから
多分鞆の中に入ってると思う
出そうか？」

「ああ、頼む」

慧音は心なしか目を輝かせている俺はその様子苦笑いをしながら
鞆の中から教科書を数冊取り出し慧音に手渡す。

「ほら、これが俺の世界の教科書だ」

「ほう、結構厚いな」

「まあ、一年間この一冊で勉強できるからな」

「これ一冊で一年間の授業ができるのか？」

「気になるなら読んだらいいぞ」

「いいのか？」

「じゃあ遠慮なく読ませてもらおう」

「じゃあ俺はちよつと出てくるぞ」

「一人で大丈夫か？」

「俺は子供か…」

「大丈夫だ、ある程度たったら帰ってくる
じゃ行ってくる」

「ああ、行つてらしゃい」

「…行つてきます」

俺は人里を探索するべく寺小屋を出て行つた。

水城 side out

第五話 人里の先生との出会い（後書き）

五話はいかがでしたか？

次は少しでも早く更新するつもりです

それでは次回で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0409u/>

東方水仙華

2011年10月8日18時06分発行